

Koryu

Ritto International Friendship Association

静と動、いろいろな日本文化を体験して

文化事業委員会

第19回異文化交流サロン ～茶道と書道体験&大正琴エレキバンド鑑賞～

平成16年2月22日



まず、お菓子をいただきます



このように、お茶をいただきます。

今年度最後の異文化交流サロンは、色々な日本の文化を楽しんでいただこうと、茶道・書道の体験と、エレクトリック大正琴の鑑賞を企画しました。

茶道は、守山市在住の臣京子さんとお弟子さんのご接待で、おいしいきれいな和菓子とお茶をいただきました。お茶のいただき方は、初めて体験する方にも分かりやすく教えてくださったので、笑い声の絶えない楽しいお茶席になりました。

書道の部では、筆の持ち方を習った後、それぞれの好きなことばを練習、最後に色紙に仕上げました。あるブラジルの方も「緊張する」といながらも楽しく書き上げられました。慣れない筆と墨での作品づくり

でしたが、達筆なものから楽しいものまで、どれも力作ばかり。特にユニークな作品には賞品が贈られました。

そしてこの異文化交流サロンを華やかに締めくってくださったのが、エレクトリック大正琴バンドのK&Mのみなさん。私たちのイメージする大正琴とは全く違う新しいスタイルのゴージャス、エキサイティングな演奏で、さくらさくら幻想曲・剣の舞・コーヒールンパなどを熱演、会場内を魅了しました。最後の曲、「世界にひとつだけの花」を演奏していただき、参加者全員での合唱をしました。



K&Mのおしゃれなステージ

今回の異文化交流サロンでは、穏やかに自分と向き合う「静」の茶道や書道、そして躍動的に自分を表現する「動」の大正琴の演奏。それぞれ魅力的な日本文化に触れることができたように思います。どの体験も楽しく時間の経つのも忘れて楽しみました。今回足を踏み入れてくださったみなさんもきっと満足してくださったと思います。

来年度のRIFAの活動もますます充実します。どうぞご期待ください。そして、ひとりでも多くのご参加をお待ちしています。(アキコ)



「三」って、簡単なようで実は非常に難しい



ユニーク賞の受賞

栗東市のALT、ミシェル・ウォーカー先生をお招きして、RIFA会員との茶話会を開催しました。

ミシェル先生は3年間愛知川中学校のALTを務めた後、郷里に戻って高校で英語と演劇を教え、昨年9月から栗東市のALT(英語指導助手)としてミシガン州のパークレーから来られました。栗東市の姉妹都市バーミンガム市の近くだそうです。毎日ギターを背負って、市内の3中学校に通っています。さぞ楽しい授業を展開されていることと思います。



そこでまずは、ミシェル先生の奏でるギターに合わせてみんなの合唱、“Let It Be(レット イット ビー)”で始まりました。ミシガン州全体のお話は日本語を交えながら話してくださいましたが、英語でもとてもわかりやすい説明でした。参加者の中には、ミシガン州を訪れた方もおられ、会話がはずみました。そのほか、アメリカの生徒と日本の生徒の違いについての質問では、アメリカの生徒は早くから自立心を持たせられるので自分たちはもう大人だと思っており、教師もそのような態度で接するが、実際はまだ成長段階にあるので、教師側としては難しい面もあるということでした。また、アメリカ人は自分の欠点は自覚しているが絶対に言わない、自分のできることをはっきり言う、でなければ弱い人間だと思われるというお話も伺いました。日本の生徒、日本人の気質をよく理解されてのお話でした。最後に、ミシェル先生が用意してくださった曲、“Amazing Grace (アメイジング グレイス)”、“You Are My Sunshine (ユー アー マイ サンシャイン)”、“Stand by Me (スタンドバイミー)”を楽しく合唱して終わりました。

～ミシェル先生のプレゼンテーションの中から～

Sleeping Bear Dune (スリーピング ベア チューン：眠れる熊の砂丘) の名前の由来

ある日、母熊と2匹の子熊が泳いでこの岸にたどり着こうとしていた。母熊の後を泳いでいた1匹の子熊が泳ぎ疲れて湖水に沈んでしまった。続いてもう1匹の子熊も泳ぎ疲れて沈んでしまった。岸にたどり着いた母熊は振り返って初めて2匹の子熊がいけないことに気がついたが、自分も疲れきっていて岸辺で眠り込んでしまった。そのままいまだに起きてこない。Sleeping Bear Dune(眠れる熊の砂丘)は、その民話を信じさせるかのような茶色がかかったグレーの色でミシガン湖の北東部に横たわっている。

ペンシルベニア発 RIFA (最終回)

栗東ではそろそろ梅の花もほろび始め、ますます春の気配が毎日のように感じられるようになったのではないのでしょうか。こんな時、とって日本が恋しくなってしまう。

2月14日のバレンタインデーのこと、娘のメロディーは保育園で3cm四方のバレンタインカードをクラスの人数分用意して自分の名前をサインして皆と交換、男の子も女の子も関係なく、先生とも交換しました。聞いたことがあると思いますが、アメリカのバレンタインデーは女性が男性に渡す日ではありません。日本のようにホワイトデーはありませんので、どちらかというとなり男性の方が一生懸命、女性にアピールしているような気もしました。女性からのプレゼントはチョコレートなのに、男性はジュエリー(宝石)やなんかを買わされているアンバランスな様子は何だか日本とそっくりだ、と笑ってしまいました。

日本では春というと卒業、引っ越しなど特別な季節でもありますね。こちらでは新学期は9月なので、春がやって来てアメリカ人がやることといえば家の大掃除でしょうか。クリスマスやそれに続くいろんな大セールで家中が物だらけ、そこで地下や屋根裏、押し入れに押し込んだ不要物を引っぱり出して天気の良い日には外でガレージセールをして小金を稼ぎます。破格の値でいいものが手に入ることもあります。

もう連載をはじめから1年経ち、これが最終回となりますが、これが機会に日本とアメリカのよいところをじっくり見つめ直すことができました。また里帰りして栗東の街を歩いていることもあるかもしれませんが、その時は一声かけていただければ嬉しいです。ありがとうございました。

「三島由紀夫に関する論文を発表した！」という彼女、今年の年賀状には「ウズベキスタンに行ってきました。」というさりげない文字と真っ青な空。そして、どうやら今後は再びどっぷりと国文学研究に没る予定のよう。日本を愛しながら、それ以上に世界を愛する。今回は古都、京都在住の柳川明美さんの登場です。



ハーン(王様)の衣装で、王様の気分?

ウズベキスタン旅行記

柳川 明美

◎お勧め図書「サマルカンド年代記」(筑摩文庫)

シルクロードが大好きな私にとって、ウズベキスタン旅行は何年も前から夢でした。ソグド人、オマル・ハイヤーム、モンゴル来襲、ティムール帝国!めくるめく歴史と文化がウズベキスタン(中央アジア南部、イランの北にはあります)。

ウズベキスタンの首都タシケントへは、週に一便、関空から直行便が出ています。首都は大変近代的で、治安も良く快適です。旧ソ連風の建物もたくさんあり、「革命広場」「人民友好家族」など街中に革命的ネーミングが残されています。けれどもレーニンなど旧ソ関係の像は、顔だけ取り替えられ、ティムール像と化していました。



ラマダンの人々

国内線で歴史都市ヒヴァへ向かいました。ヒヴァは町全体が遺跡で、タイムスリップしたような気分になります。その中で、今でも普通に人々が暮らしています。首都との格差が激烈く、いまだにロバに上レングの住まい、といった様子です。遺跡内のメドレセ(イスラムの神学校)に宿泊し、めっちゃくちゃ楽しかった!しかし、水すらまともに出ないうえ、砂漠の風で窓は閉まらず、嵐のような暴風の中で寝なければなりません。ミナレット(塔)へは懐中電灯を口にくわえて崩れかけの階段をよじ登って



メドレセ(イスラム神学校)

いきます!ヒヴァは全体が迷路のようになっていて、まるでインディ・ジョーンズ!



ブハラのカラーン・モスク

ブハラやギジュドゥパンを経て、サマルカンドへ。青の都という名にふさわしく、至る所に夢のように美しい青タイルの建築物が立ち並んでいます。特に夜のライトアップはアラビアンナイトそのもので、お勧めです。

ウズベク人はロシア系、遊牧民系、ペルシャ系、と様々ですが、みな商売気がなく素朴で美しかったです。突然民家に訪問すると、恥ずかしそうに、それでもつついっ長居してしまふほど本当に温かくもてなしてくれるそんな人々でした。



イチャン・カラ直跡 (ヒヴァにある世界遺産)

